

#### 第四節 名称・呼称など語詞の生活

単語の集合体のことを語彙という。語彙とは、数学でいうところの「集合の法則」のように、多数の語詞が類化したり対立したりしているという体系的存在態のことなのである。親族名称とその呼称、それぞれの家の屋号、あるいは毛筆にかかわる語詞というような、名称・呼称の群れも、集合という体系的存在をなしているものである。なぜなら、それらは親族関係、家あるいは毛筆とその製作という事物に対応する名称や呼称の語詞群であり、その外延は明確に他の事物と区画されているものであるからである。

##### (1) 親族名称・親族呼称

人間どうしの関係を表わす名称は、職業とか生活環境とかによって決定づけられた、それぞれに一定の構造をもっているものである。ところが、親族関係そのものを表わす語は、地域によって語詞の形こそ違っても、関係そのものが変化していることはない。その点で、親族関係を表わす語は、人間存在の固定的関係そのものを表わす語詞であるといつてよい。

親族関係を表わす語には、当人から見ての、親族関係そのものを表わす語、すなわち「父母」とか「兄」とかという、関係にあることを表わす語の一群がまず注目される。これを親族関係名称語彙ということができよう。次に、親族間で、呼び合う際に用いられる語の一群が見られる。人名を用いたり、親族関係名称を用いたりされ

る。これを親族呼称語彙ということができよう。

ここでは、親族関係名称と、親族呼称とを別々にとらえ、両者の、熊野町における語彙上の特色について考察してみたいと考える。

親族関係名称 当人から見て、上方に位置する関係者から、見ていくと、次のようである。

(ア) 親

オヤ

リョーシン

(イ) 父 親

オトーサン

オトーチャン

トツツアン

トツチャン

(ウ) 母 親

オカーサン

オカーチャン

オカカン

オカン

(エ) 祖 父

(改まった言い方)

(老年層男子以外の各年層で、最も多く用いられている。)

(老年層男子に用いられる。)

(中年層以上の男女に用いられ、やや下品な言い方)

(改まった言い方)

(老年層男子を除いて、最も多く用いられる。)

(老年層男子に用いられる。)

(老年層男子での下品な言い方)

オジ|ー|サン オジ|ー|サン

(改まった言い方)

ジツ|チャン

(各年齢層でよく用いられる。なお、他家の老年男性についても用いられる。)

ジ|ー|サン

(中年層以上の男女に稀に用いられ、他家の老年男性の一般呼称としても用いられる。)

ジ|ー

(老年層男女に用いられ、下品で悪しざまに言う言い方。他家の老年男性についても用いられる。)

(オ) 祖 母

オバ|ー|サン オバ|ー|サン

(改まった言い方)

オバ|ー|チャン オバ|ー|チャン

(老年層男子を除いて、最もよく用いられる。)

バ|ー|チャン

(中年層以上の男女に稀に用いられ、他家の老年女性の一般呼称としても用いられる。)

バ|ー|サン

(中年層以上の男女に稀に用いられる。)

バ|ー

(老年層男女に用いられ、下品で悪しざまに言う言い方。他家の老年女性の一般呼称としても用いられる。)

バ|バ|

(「バ|ー」よりもやや上品)

(カ) 祖 父 母

ジ|ー|バ|ー

(ワシノ ジ|ー|バ|ー|ジャ。私の祖父母だ。)のように用いられる。)

祖父母を、一組の語として表現することはない。「ジ|ー|バ|ー」の語も、一語であるとはいえないようにも見え

よう。ところが、この語のアクセントを、右に示したアクセント表示法でなく、別の表示法で示すと、次のようになる。すなわち、上がり目を「、下がり目を」の符号で示すと、次のようになるのである。

「ジ」ーバー

このアクセントの形からすれば、一語と違って差しつかえないかとも考えられる。

(\*) 曾 祖 父

ヒージーサン

(稀に「ヒージーチャン」とも)

(ク) 曾 祖 母

ヒーバーチャン

(稀に「ヒーバーサン」とも)

(ケ) 伯 父 ・ 叔 父

オジ

「オジ」の形が用いられることは、ごく稀である。

オジサン

(呼称としては、「オジサン」の形が用いられる。名称と呼称とで、アクセントの形が異なるのは興味ぶかい。)

オッチャン

(中年層以上の男性の一般称としても用いられる。)

(コ) 伯 母 ・ 叔 母

オバ

「オバ」の形は稀

オバサン

(呼称としては、「オバサン」の形が用いられる。)

(ク) 兄

アニ

「アニ」の形は稀

I 生活誌編

アン|チャン アン|チャン

(年齢の上の兄を「オー|ケ|アン|チャン」、下の兄を「コマ|アン|チャン」)

アン|ヤン アン|ヤン

(相手を、やや見下げていう。若年層の男性の一般称としても用いる。)

アニ|サン

(義兄を指すことが多い。また、年齢の差が親子ほどに離れている場合の兄につ

いても用いる。)

(シ) 姉

アネ|ー

(「アレ|が ワシノ アネ|ー|ジャ。あの人が私の姉だ。」のように言う。)

ネ|ー|チャン

(ごく一般的に用いられる形)

オー|キ|ネ|ー

(年かさの姉。やや下品な言い方)

コマ|ネ|ー

(年若の姉。やや下品な言い方。より上品には、「オー|キ|ネ|ー|チャン」「コマ

ネ|ー|チャン」のように言う。)

アネ|サン

(義姉を指すことが多い。また、年齢の差が親子ほどに離れている場合の姉につ

いても用いる。)

なお、「ネ|ー|ヤン」の形は、姉ではなく、「ブ|ゲ|ン|シ|ャ」(分限者=金持)の家の、作男の妻などについて言うのが、一般的である。昭和六十年(一九八五)現在では、この種の仕事に従事する人がなくなって、ほとんど用いられなくなった名称である。しかし、時に、ある女性を見下げていうのに用いられることが全くないわけではない。

以上が、ある一人の人を中心として見たとき、自らよりも上位の関係にあると見られる人々に対する親族名称である。上位の関係にあるとはいえ、それぞれの人々に対する人間評価が、その名称に表われているといつてよ

い。中でも、敬称の接尾辞のつき方によって、その親族名称で呼ばれる人をいろいろに評価し分けることは、注目されるであろう。すなわち、敬称の接尾辞を親族関係を表わす名称に付けることによって、その名称を呼称化するだけでなく、その人をどのように評価しているかを示すことになっていくといえるのである。親族名称が、親族呼称の形をとるということは、その親族関係が自分より上位である場合に限られることは、日本語に広く認められることである。しかし、呼称化するための接辞の形を変化させることによって、親族名称の敬位度を変化させているというのは、広島県地方に広く認められる傾向として注目してよからう。それが当町にも認められるわけである。

○弟

オトト

オトトト (中年層以下の人々の言い方)

○妹

イモト

イモトト (中年層以下の人々の言い方)

○従兄弟、従姉妹

イトコ

○子

コ

○末子

オトンボ

○孫

マゴ

○従兄弟、従姉妹の子ども イトコ ハン (「イトコ」とさらに、半分の関係が加わっているという言い方)

○両親が、ともに従兄弟、従姉妹の関係にある者 フタイトコ

○甥

オイ

○姪

メイ | メー |

○婿

モコ

○嫁

ヨメ |

以上のほかに、親族名称をもたない。親族名称を越える親族関係を表わそうとするときには、「オイノ | コ | (甥の子)」「アレノ | ジツチャンノ | オツカー | ヨ。(あの人のお祖父さんの母親よ。老男↓中男)」のように、ことばを重ねて用いて表現することになる。

以上のように、自分を中心として、下位の親族関係を表わす名称については、使用年齢差のある場合を除いて、それぞれ一語しかない。そのうえ、それらの親族名称が、親族呼称として用いられていることはない。下位に向かつては、人あしらいが単純化しているということができようか。

自分から見て、親族名称で呼ぶべき関係にある人が、上位の人である場合、親族名称中の呼称の形をしたもので、その人を呼べばよい。しかし、親族名称しかもたない、自分より下位の関係にある人を呼ぶときには、呼称を有しない。その場合には、当地では、人名呼称が用いられることになる。このような場合には、

○タケチャン。 竹ちゃん。(竹男さん)

○ミツチャン。 光ちゃん。(光人さん)

○アキチャン。 秋ちゃん。(秋代さん)

のように、その人の名の、前半部に呼称を形成する接尾辞「〜チャン」を付して呼ぶことになる。「〜チャン」の接尾辞は、他地方の人からすれば、いかにも幼い者の物言いと感じられるかもしれないけれども、当安芸郡一帯の地域では、老若男女ともに、これを相当に高い敬態を表わす呼称辞として用いているのである。「〜チャン」

の敬態は、他人行儀でない程度の敬態表現としては、最高のものである。その点、「ッサン」「ッツァン」は、どこか冷たい人間関係の見られる呼称辞と云ってよからう。

これらに反して、「ッヤン」は、親密感のある呼称辞である。

○モーヤン。基さん。(基次さん)

○ツネヤン。恒さん。(恒男さん)

このように、「ッヤン」は、男性に対して用いられる呼称辞である。女性も、同年の男性に対して、これを用いている。女性が用いても、特に相手を見下げていないわけではない。また、見上げているものでもない。同年の親密な間柄にあることを、「ッヤン」で示しているものである。

自分を中心として、自分より同輩若しくは下位の関係にある者に対する呼称は、その人の人名を、そのまま呼ぶのが、男性どうしの場合には、ふつうである。たとえば、「ヨシアキー」(芳明)、「ミツジ」(光次)のようである。この場合には、最終モーラ(最後の音)が延ばされがちである。呼称の音声的な特質が、ここに見られると云ってよからうか。

見下した呼称は、「ヨシ」(芳明)、「ミツ」(光次)のように、名称の前半部のみの形で表現される。この言いは、通常、女性において用いられることはない。

### 長兄の嫁に対する呼称

前述の親族名称のうち、「婿・嫁」は、親族関係を示すというよりも、家族関係を示す語であるといったほうがよいものである。そのため、わが家の婿や嫁についての名称として用いられるのみならず、他家において、その家にとって婿であり嫁である人についても、その関係を示す名称として用いられる。そのため、このことは自身が親族呼称として用いられていることはない。



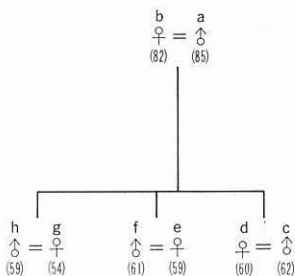


図 1-4-1

嫁に対してどのような呼称を用いているかということについて、S家とその分家T家との場合を調査した。S家の家族構成は、図1—4—1のようである。図中の括弧内の数字は、満年齢を示す。そして、それぞれの性別符号の上のアルファベットは、それぞれの個人用記号を示すものである。

aが、長男の嫁dを呼ぶときにも、bが呼ぶときにも「ネーサン」である。ところが、長男の妹であるeが呼ぶときには「アネサン」となる。その妹のgが呼ぶときには、「オネーサン」となる。義姉を「アネサン」と呼ぶ世代が、六〇歳以上の人に多いことを考えると、eが「アネサン」と呼ぶのは当然である。ちなみに、e、gそれぞれ別の婿であるf、hも、dを呼ぶときには「アネサン」と呼んでいる。妹gが「オネーサン」と呼ぶのは、新しい語形であるといえる。

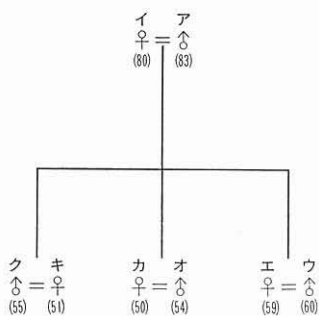


図 1-4-2

S家の家庭は、代々熊野町に住む、いわゆる本家筋の家である。S家の八五歳の主人の弟家族は、三〇年ほど前まで、広島市内に長く住んでいた人たちである。これをT家とする。S家とT家との間での関係を見ると、次のようである。すなわち、アとイとの二人は、S家のbに対して、「アネサン」と呼ぶ。さらに、aの妹(七八歳)も「アネサン」と呼んでいる。しかし、広島市に嫁いでいる妹(六六歳)はS家のbに対して「オネーサン」と呼んでいる。これら二人(七八歳と六六歳)の妹は、T家のイに対すると、イを上の子(七八歳)は「ネーサン」、下の妹(六六歳)は「ネーチャン」と呼んでいる。長兄の妻と次兄の妻に対する呼称は、

それぞれに異なっていることが、まず注目される。長兄の妻のほうが、より高い敬称をもって呼ばれているといえるわけである。また、このことから、「アネサン」の呼称は、広島市内に嫁いでいる人にとっては、六〇歳を越えている人の場合、既に用いられなくなっていることがわかる。都市部から「アネサン」の呼称が失われつつあるといえようか。

さて、T家の家族構成は、図一—四—二のようである。長男の嫁であるエは、義父母のア、イから「オネーサン」と呼ばれている。また、カ、キの二人からも「オネーサン」と呼ばれている。S家の場合のように、エが「アネサン」と呼ばれなくなっているのは、T家の家族が、長年広島市内で生活していたためであろうかと思われる。広島市のような都市部では、かなり早くから「アネサン」の呼称をなくしていたことが、以上の熊野町のS家、T家の場合から帰納されるといえるようである。

#### 対面時における家族間の呼称

子どもの夫婦どうしが、a、bの前で、あるいはア、イの前で、どのような呼称を使っているかについて調べてみた。また、二人称代名詞による夫婦間の呼称がどうであるか。また、自分の連れ合いに対する言及称がどうであるかについて調べた。

こうしてみると、S家でもT家でも長男の嫁に対する呼称が特異であることがわかる。都会的なT家においても、長兄の嫁は特異な呼称で呼ばれていることが、まず注目される。

次にS家では、人名呼称を用いる場合「くちゃん」づけ呼称が多く認められるのに対して、都会的といえるT家では、その量が、ぐっと少なくなり、イ、カ、キの三人の女性が、それを使用しているにすぎない。熊野町一帯で多く用いられる「くちゃん」呼称が、それぞれの生活経験によって変化しつつある状況が見受けられるわけである。

表1-4-1 S家における家族間の呼称（ローマ字を丸で囲ったものは女性、丸なしは男性）

呼ぶ人	呼ばれる人	a	b	c	d	e	f	g	h
a			オカーチャン	○	ネーサン	○	○	○	○
b		オトーチャン		○	ネーサン	○	▲△	○	▲△
c		オトーサン	オカーサン オカーチャン		○	○	○	○	○
d		オトーサン オトーチャン	カオーサン オカーチャン	アンタ		▲	▲	▲	▲△
e		オトーチャン	オカーチャン	アンチャン	アネサン		アンタ	▲	▲
f		オトーサン オトーチャン	オカーチャン	アニサン	アネサン	オマエ		▲	▲
g		オトーチャン	オカーチャン	アンチャン	オネーサン	ネーチャン	アニサン		アナタ
h		オトーサン オトーチャン	オカーサン オカーチャン	アニサン	オネーサン	ネーサン	アニサン	○	

注1 表中の○印は、名称の呼びすて。

2 表中の△印は、「名称+さん」。

3 表中の▲印は、「名称+ちゃん」。

4 2項の記入がある場合は、上に示すものが一般的。

5 ローマ字の上の「」印は、一組の夫婦であることを示す。

表1-4-2 二人称代名詞による夫婦間の呼称（S家）

呼ぶ人→呼ばれる人	呼 称
a → b	ワ レ
b → a	ア ン タ
c → d	ワ レ
d → c	ア ン タ
f → e	ワ レ
e → f	ア ン タ
h → g	オ マ エ
g → h	ア ナ タ

表1-4-3 父母（a, b）の前で、もしくは子どもの前で、自分の連れ合いに対する言及称

呼ぶ人	呼ばれる人	言 及 称
a	が bを	オカーチャン
b	が aを	オトーチャン
c	が dを	○
d	が cを	ウ チ ノ ン
f	が eを	○
e	が fを	ウ チ ノ ン
h	が gを	○
g	が hを	ウ チ ノ ヒ ト

注 ○印は、家族間の呼称の場合に同じ。

表1-4-4 T家における家族間の呼称（仮名文字を丸で囲ったものは女性、丸なしは男性）

呼ばれる人 呼ぶ人	ア	①	ウ	㊥	オ	カ	キ	ク
ア		オカーチャン	○	オネーサン	○	△	○	△○
①	オトーチャン		▲○	オネーサン	▲○	△	▲	△
ウ	オトーサン	オカーサン		○	○	△	○	△
㊥	オトーサン	オカーサン	アナタ		▲△	▲△	▲△	△
オ	オトーチャン	オカーチャン	アンチャン	オネーサン		オマエ	○	△
カ	オトーサン	オカーサン	オニーサン	オネーサン	アナタ		▲△	△
キ	オトーチャン	オカーチャン	オーキ アンチャン	オネーサン	コマ アンチャン	オネーチャン		アナタ
ク	オトーサン	オカーサン	オニーサン	オネーサン	オニーサン	オネーサン	オマエ	

- 注1 表中の○印は、名称の呼びすて。  
 2 // △印は、「名称+さん」。  
 3 // ▲印は、「名称+ちゃん」。  
 4 2項の記入がある場合、上に示すものが一般的。  
 5 仮名文字の上の「」印は、一組の夫婦であることを示す。

表1-4-5 二人称代名詞による夫婦間の呼称（T家）

呼ぶ人→呼ばれる人	呼 称
ア → ①	オ マ エ
① → ア	ア ナ タ
ウ → ㊥	オ マ エ
㊥ → ウ	ア ナ タ
オ → カ	オ マ エ
カ → オ	ア ナ タ
キ → ク	ア ナ タ
ク → キ	オ マ エ

表1-4-6 父母（ア、①）の前で、もしくは子どもの前で、自分の連れ合いに対する言及称（T家）

呼ぶ人	呼ばれる人	言 及 称
ア	が ①を	オトーチャン
①	が アを	オカーチャン
ウ	が ㊥を	○
㊥	が ウを	△
オ	が カを	○
カ	が オを	△
キ	が クを	△
ク	が キを	○

注 ○印△印は、家族間呼称の場合に同じ。

さらに、S家では、二人称代名詞による夫婦間の呼称に、男が「ワレ」、女が「アンタ」を使っていることが注目される。それが末の夫婦すなわち五四歳の妻と五九歳の夫の場合にのみ「アナタ」「オマエ」に変化している。これを、当地での敬態に従って整理すると、次の表のようである。

タ	エ	レ
ナ	ン	マ
↑	↑	↑
ア	ア	オ
		ワ

T家の場合には、この表中の、「オマエ」以上の、三つの段階が用いられている。当地で、古い語形とされ、それゆえに敬態も低い「ワレ」は、T家では用いられなくなっているわけである。S家に比して、T家の、二人称代名詞による夫婦間の呼称は、当地でのより新しい呼称を使用しているといえる。

親の前で、もしくは子どもの前で自分の連れ合いに対する言及称についても調査してみた。両親がお互いのことを、子どもの前で説明する名称は、S家、T家ともに「オト<sup>1</sup>チャン」「オカ<sup>1</sup>チャン」である。ところが、子どもたちの場合、S家の女性は、自分の夫を「ウチ<sup>1</sup>ノン(うちの)」あるいは「ウチ<sup>1</sup>ノ ヒト(うちの人)」といっている。これに対して、T家の女性は、「くさん」づけで呼んでいる。夫の名を用いなかった当地の言語生活の中に、夫の名を呼ぶに至った家庭が成立している状況が、同一の家系のうちにおいても認められるようになっているわけである。

S家とT家とは、同一家系の家であるが、わずか一〇年間ほどの、T家の人々の広島市での生活が、そのことばの生活に大きく影響している様子が、うかがえた。T家の場合と同じ傾向が、より若い人々によって構成されている家々において観察された。近来、広島市との交通の便が、加速度的に発達してきている。このことと、ことばの変化との間には、深いつながりが認められるといつてよいようである。